

西洋道中膝栗毛

六編上

14
1260
11

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

假名垣魯文著
落合芳幾画

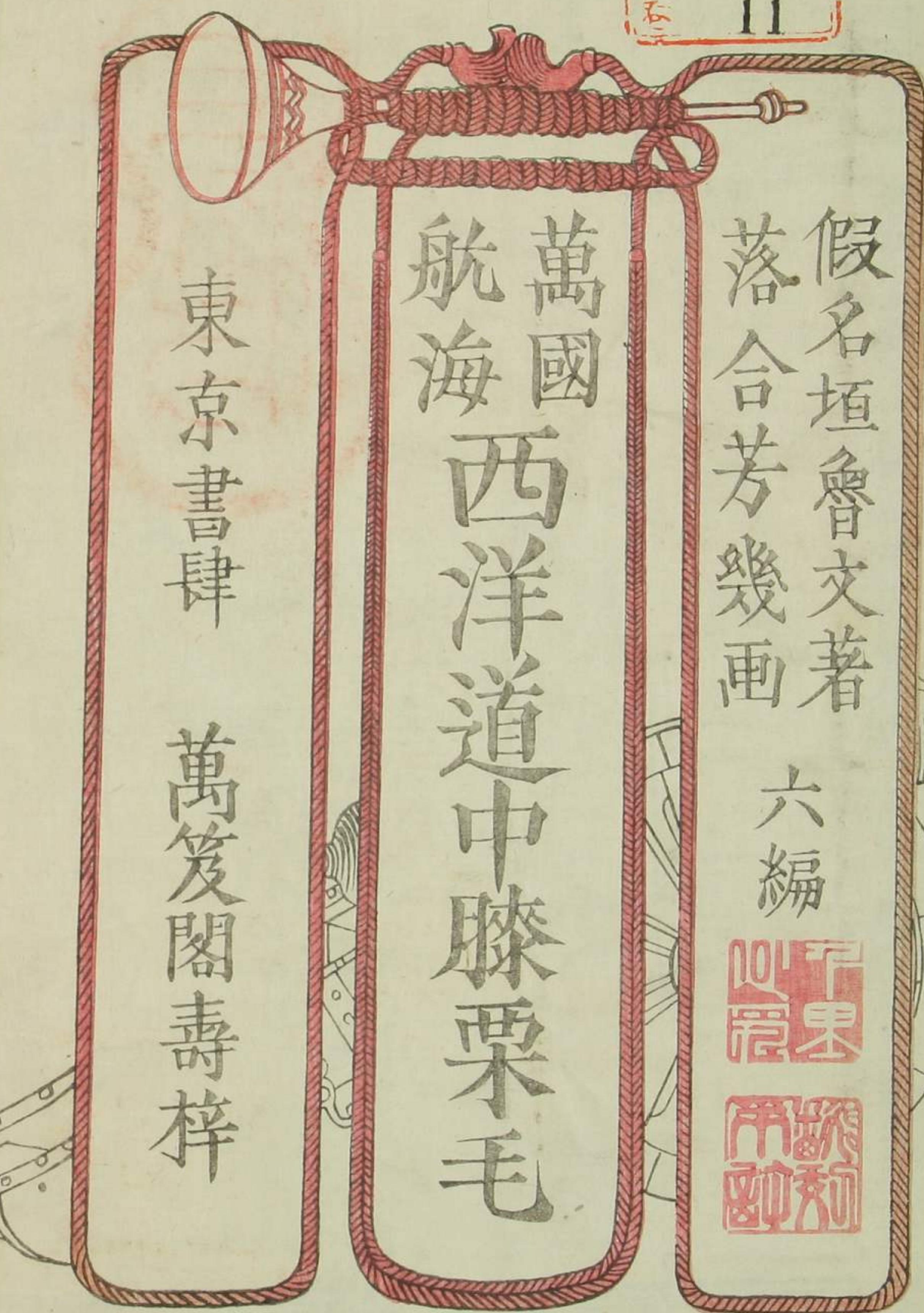
六編



萬國 航海 西洋道中膝栗毛

東京書肆

萬笈閣壽梓



文を以て友我會々に曉よ者此稱之
思ふを賣る事口を敝本成錢作古と是れ
大至極要と無用の區別雲江東墨戎
獨り不至る庶莫博之多有居者そ
有不至實の謬論然り乍る劍銳

炮を構む者小輩事多好んで體満
平穏す多ひ大典も小典亦併せ之氣
根の弱きは乘機の強き不妙也計
不如赤壁ノ一小島學問於古戰伐
同之大聲罕耳入居きと以て皆
局外中立の祀を守り放て難儀乃

席よ臨むに滑稽無よりは壹よ滑
索実を史籍の器械尔之ト全才
力歴ある故少くノ只戸口故
御代の恩賜が少く称多用矣
何とけ紅葉御史も古用乃一具
所謂官園強兵の策也多難以尔

通ひて鼓腹呂平の化と如誇言せ

政治にツヅクし

卒未の夏より免

かか極の道

魯文尚注



西洋道中膝栗毛第六編序

曲亭の老馬夢想兵衛を輿駕て、無何有の異
卿を經歷り、假名垣の轡械飛脚船を脚て、世
界萬國々航海しとせしと彼へ紙鳶の罠械小
乗じ是の風衣の旅服を調せり、其趣向髣髴
たれども其話説とくに同意かず、馬琴翁と
魯文大哥と學問を比せば、桃灯よ梵鐘翁へ

倭漢の史籍よ涉り。子ハ文盲の出放題任他
机上の起草疾筆よ、人情世態滑稽洒落都て
流行の穴を穿鑿て蟹の歩行者横文字よ記
載し事情と翻案し、目前よ涉る戯作者魂學
びく得々平凡尋常自得の所業ハ小技と
金亦奇ととくよ足ぐるん

北馬道の藪拳士

玉川亭香魚記







• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3

西洋栗毛六下



西洋道中膝栗毛六編上

東京

假名塙魯文戲著

航海の旅御船揚葉鳥ヨリゴーの港を出航し
アデンとはじて安生もよける千里の長途取路
九月十日を経て達らると岐日早速中をめく
退屈茫然のありて酒を船籠をくまひ菸を
財物をはじめ没ゆるたゞ後悔よりあをし
吳越の仲ることあるひに己ぢ古に自慢の縁を

修る虚八百絵は蛇尾の庵尾を押つてあげ
足をとる者も向まへあ段物の取怪達へ立消
のきるとの事かされば跡は脚か八ビジム
りづれもさゞやくその中は被通脚かつてよ
ひもくあやらんをよみあづライ通さんコレサ通
さんといつてゆきを夏中よみつてよんでもうん
ざ通くコレカヒリやア外の新圖サ跡はん
だり除文だり版物の列をスルやうるゆのを

ひねりすりとあくよぢかりの面白からうが
世方もゆアさりもりりからうわく
どももく
とよりのひ陰きよふと傍でそとせくあまく
やうせんふりのひきらべやあくへひまへあくと
をほじもあゑせんナ通するせくてある今お
前画白イきのちうをそもからうあやべるからま
ぐ教つて身よ深ねくがは新まへ陽葉モテル
先生から傳述シジのびり向こすりあよざいが

ねくらり懷うけづ實よま禮サ絲アあんぞ
めづらシイザ座がゆるか子通アソラヤア聯渉ハ
さるぐありづらとの内又例の私榮西と舊
魯士の大戰車が祀載てあるが御先やせうれん
すりたのこうだから彼たちひを一轂四邊馬銃
軍談シモモトムリトソヌクド絲ヲツト糞と
舌師シモモトムリトソヌクド絲ヲツト糞と
小便ハ一束よ喰ツたから北ハムヤア口し合だ子
北立ミモモトムリヒキセテ狗を薦へさせるせ

モウタせひろんの一休ハけりよも増りみしだ
通モムグサミンアグアんびゅうよ神^カハナリ
カラートムリ辨トやせう絲^カソノウハモロム
面白カムラサク^カハ度^カムモモルビ^カ
通ちんちんちん^カモモシる^カモモシ^カモモ^カモモ^カ
繕^カの方^カ好^カだから太牛紀^カ場^カ激^カ花^カモモ^カ
阿^カまのどん端^カけほしき^カモモ^カモモ^カモモ^カ
家^カモモ^カモモ^カモモ^カモモ^カモモ^カモモ^カモモ^カ

家が有ツクシリねエ山アカマヤトニシテアシナキ事ミがある
がすヨアラ山タケ朝タケや柳橋タケより繩索タケ北馬タケの舍
鷺鷗タケは豆熊タケの蟹飯タケ小ああせくタケ而タケふそれ
よりう菴タケ而タケ日タケの虫タケの牛肉タケをすき燒タケやしき
一行タケもぞらうもぐいタケ子タケ「ヲヤあわきよお世タケ
日タケもきタケア牛タケやあめもよりらあやめんぐいタケの
でスヨタケ北タケアハタケとづれひタケ猿波タケさんタケもどん猿タケ系
く通タケこれサタケ僕タケお角タケ弁辟タケやうともると

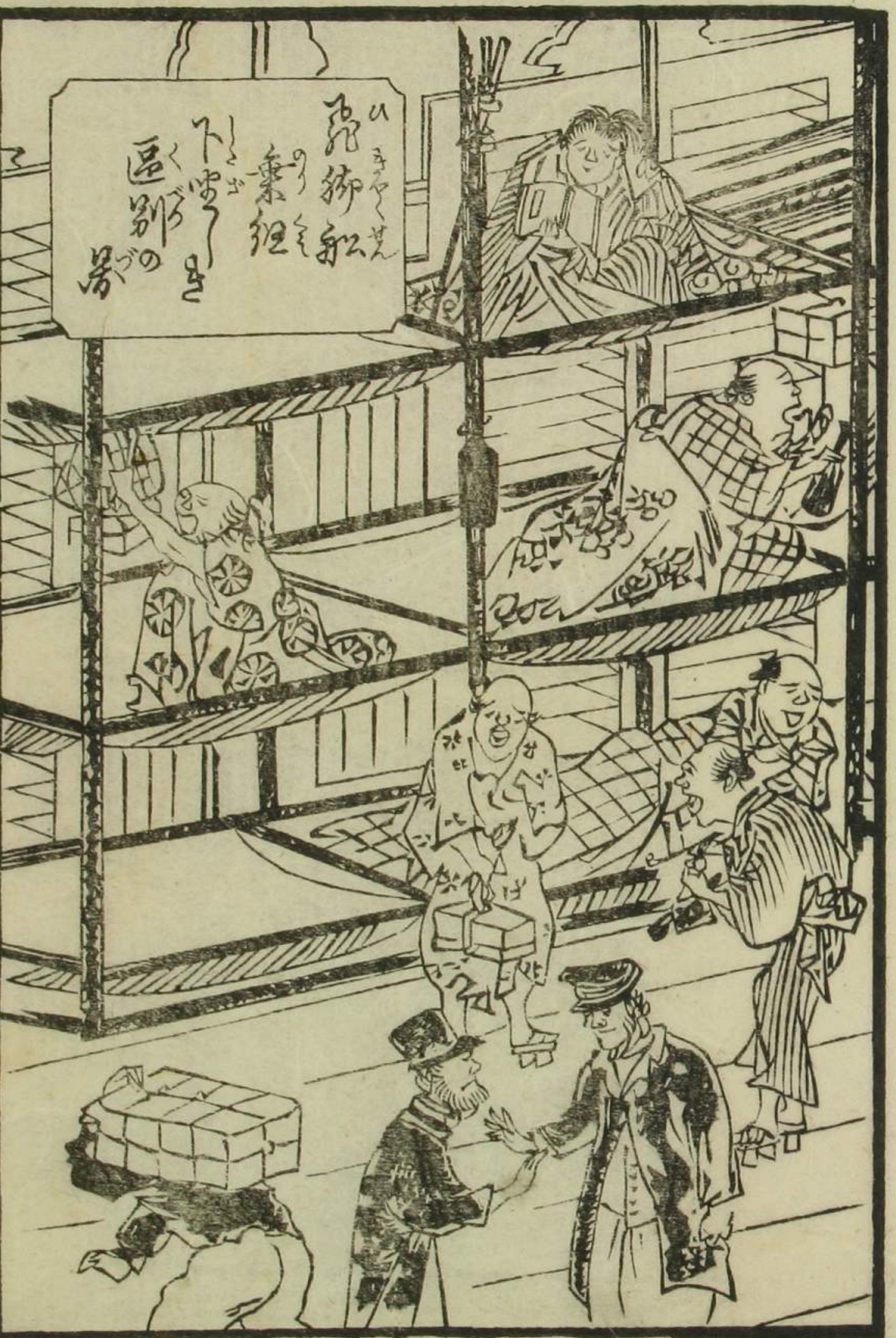
ちくへりもほしよ枝タケづ喉タケから構活師タケづく
ハるタケヲツトのとくさんあづあづよ東西タケ
トれあてやるタケ、あんとあう男女タケのちどりうらもとくと通海タケが
まよつりけると通海タケハ正タケんよをしなをうあまよかくテイブル
をよよすあのかみタケトシタケとひめじをう通タケヘシタケ
せれをらひニツニツタケすわゆうそきタケす
や年タケじゆきタケ方今五方測内政羅巴者國タケよやえ
ど有國タケの大國タケ彼タケあらんすとふうあやのあ
就荒タケおあらそひあ雄タケひあらび立タケたモの理タケはし
てたゞひよふをいどと無權タケをくらむるよ多タケり争タケて

たたかひふあまみのかわ陽今日の廢切ふ衰と
仕ります北サウラウムアヤリルサアムシ
タクダ込食すもがくヅム縫をくでる喧のをも
アラカアミ北モシ女子達もあどひきをか
引あそむをきりのづへの生邊だら生張つて
ゐると大施ヅケンのんダ女ラヤキミカセさんだ
ヨバあらうの用ひは廿八日からあるからハセ
あんといみやアをすびません跡コレサホグコニ志

タラシイと通エリハ西洋紀元一千八百七
十年。第九月中旬。既ニ舊魯士の總軍。あらん
もの三世帝拿破崙の軍備矣。七十万余方の軍
軍を彼領地ありけるところの。滅津府よかくして
唯一戦よ討被り。敵を退こと十六。勢ひ糧餉
の難革を屬り。あくとも象の波を騰立。擅
樹の林よのぞもぐ如く。ズシト。エイヒ。ズン
でけ。ズンく。ズンどぞん。トツ。ヒイヒヤロ。ヒイ。ヒイ。
トツ

炮の連轡まんぢち。大炮の雷声らいせい。口と。煙りん
矢を覆ひく白雲しろくも。北へ猿籠さるののきにて蘆窓よしのまど
踏ふむ不破ふわたり。夏なつよりの公幕西勞ふくらみ せいろう。是いを蜀しょく
の勝かつ。城濠めいりよりして西にしある。真津養河まつゆうがの
岸きしよそし。水みずを立たて稍すことゆ。あざくとを
防さへんと。萬まんにし海かいへを立たてやせ。海かいもあらせ
す。あらわの勢軍せいぐん。二十万八千人。署じあるもの
鷹たか。數百軒いくびんを。豫よの。陈ちん。跡あとからし。あら
え

小進おきとまわる。先陣せんぢの戰將須丹印せんじょう すだいん。十
連隊せんたいの強兵きょうへいを。恭候ごうとう。右うは統とうへ十八門じゅうはちもんの大炮
を。ありづらありづら。小盆こぼんべ体たいへ。その上うえ立たて如ごとくとあれ
ば。金飾きんしょく。うぐうぐ。高帽子たかばし。身み。裏皮うらひの。ま。目め。口くち
歛ひらひら。を。あ。口くち。ふ。冠かんむり。絢えん。頭かしら。毛け。羅紗らさの
箇か。絶ぜつ。よ。を。ひ。じ。き。神かみの。刻とき。綴つづ。纏まとい。羅紗らさの
室牌しつばいを。つ。し。さ。げ。向むか。び。や。る。の。左ひだり。く。右みぎ
よ。下しも。ゆ。う。と。役え。ぐ。絢えん。鞭ひん。轍わ。を。相あわ。騒さわ。



指揮して進みたり。中軍より舊魯士公王[ウイ
ルヘルム]年齡七十有七十三才。額より西洋の衣装を
うるせ。鬚[ヒゲ]は白絹の足びらきよりなるとく。まきそ
附星の光をあし。裏[アキラ]ハ「マラヤ」の山猿より作つて。又
王の日の歩立へ象皮の毛帽すよ。金の累[カネシ]を
をうちをそぐたる位冠をひびに「ユニフラム」の剥羽
鐵ふ。金銀除此七宝の飾りをそろひけ。食ひ物を
筋[ミドリ]入り。羅紗仕立の役司[スリッフルス]のうを

をき。右手小刀扇をたゞぎて。四輪の馬車より春繁
とぞ。六太豫の左被兵。右門の右砲をも。復
会[ハサ]じて。陸続として進みたり。後陣の正旗一
チヤーレス。十三「レジメント」の號兵を二千五百。バツ
テリイの右砲を前渡ふ。敵へ一聲の喇叭。舊魯士公軍
をましめ。敵方の當者をボカラ。ピイ。ブウ
ビ。ブウ。ト。ピ。ブウ。ト。ツ。ツ。ツ。ピ。イ。どんどん
どんどんぞんぞんのん。ゾン。ゾン。大砲

一朝ひくぐりあや。敵軍の連發ふ岳よあるひ。
地獄も崩るをかうあり。此時よ當て佛國の鐵
將カルロベールハセイ区のあ將ハ。勝利砲兵三万余
人。帝の親王御方みよ。を後被奴よ今豫
カルロベールも上よ師令の小旗をたゞす。八方か
死めぐる陣跡よ大喜あげ。ヤア士卒。耳ひつたく
よツくきけ。今日の一戦こそ。多磨の存亡ともよ
あり。かむれ野外ふきりまとども。私辱を世界の

新聞よとむる。死ねやかく。砲隊すすめ。
うや巻くとそび一き揚揚よ。色めいたつる
そらんも勢。あどろの足並踏あらそ。一つも
後よ追ぞくも。殊死の巣にそがへ。或いは
うち休くうち。死體を猪々捕とひし。祝うくる
生どもさくる。腰あく。見附されども記すよ間
あし。附ふあらわやの冲軍より。うち出しつる
ボンベンの彈丸の陣中へ。ブウ。薦ゆると

見るうちよ。急忙そとよ被襲して。花輪の三櫻大
の車。牛房ゆりの様の風。びんぞう人の太晦日。
たのむへ秋葉の二弓房。道子さんもぞうよくな。
お湯のねぐらへ小田原。ゆけどめ萬へ外神田。
花御私でもあるあつまひ。黒鬚あ玉へあづみ
と。船櫻圓素あわくこあらず。かることなく取
えうさ吉やけどよ能きく座がらし。ひまこと
辛い山椒味噌。これを程みつけ燒ひ。よの軍手

かもりふ。あめとのうさぎの大兵柄。たぬき森
のも鹿をみて。因ざましかしきる。次第あり。よ
りよこまより。舊魯士の太元師「ヒスマルク」を
りつくバッテーラを遣り。佛の帝「ナポレヲ」に
大海中へ沉めるのかね。一寸一息つづりく
や年じゆをエヘン。コウ通さんそのひさま
まよて。実猿う子通。寒猿どうろう者國の郭
聞紙からおむしうがくらえきく。ゆうな

虚をつゝ詰施アラガシを身と一妙リラヨよされちやつる職
ふあくねく北ホキにあじつもひみのバッティラで身がれ
をんをあぐる後アガ産ハサい触タキくく移ヒカ子ヒコ小観ヒツクだ
しの都シテをしげ種タナだらう通スルそとづ所スル僧
柔利マヨリといふのサカちやうとんから移ヒカ僧スム
ニ通スルうかう志シテぶらからシテがやアカハさん
み被カミ料リョウを拂ハラく席シタ一席ハシタまやびすマヤビス
サカりびきの身ヒトを般魔ボンマがらきくとゑエごく

茶カを汲ハシんでこらわる。身ヒトがらう通スルそとづ所スル僧
院カニはく僧スム院スムの攤カミきらひをしきりうりもま
ねく身ヒトをヤレあカニかカニへどうづの文車カニからだ
のと羅拂ラハシをりうめりあるひとが彼ジ人ヒトねよ云ヒトゆ
アカリカニのあくを拂ハラておまくともする時トキかよ
むも程カニのあくを拂ハラておまくともする時トキかよ
むと吹キいたらそうササンさカニ修羅場カニの素儂カニを

西江采毛六士

七

魯文

賀

ひきやすれ

軍をほしが

はくみ

ねみ

うる

まみ

弥次



供
七

北八

通次郎



二三

三

まちうもぢへ絶じしくて傷られぬ／＼まちう
あつとくと弁じるとスナ／＼傷られやも。よき
よけだけ森ごくうぐりからそとくよと下
れとくらとくりやした跡ア／＼ありづへり
世の中みやア御ゆきのもあるりんざノウカハ
カヲヤ帰アレしきあれをあくう磐峰のそくう
あぐら篠松とまちやア年のみゆく時から
陸送シテ下谷の半枚亭内祐因の小柳沙室

え附の左平紀ヨ附テお町の併勢又から今
川橋の深川まで影巻の樹林ぐんか車を轡
してまどこのうち葉林の樹發動ハ何日め
度数の壁塗だとう。漱花の義士櫛くらげ誰
の傳紀でサ。あ翁のくせんのん／＼ズン／＼スバ
バア。貞山の切ハサヌグアと一綱ふ絆あげ
とりよことから。宿のあくゑの卒だとりよのも
一百のこととヨ。片手ア六十を倍とあが四ツ目サ

擁あが笑あが和田がヒツ引船ひあぐ鷺の
丸といふことまで解りぬのとあるかハさんだ
る麻よもぎも大葉よもぎアシどんみりんミリ
詠ヨンどんみりんミリどんみりんミリどんみりんミリ
へがおやべつてゐるおやア船へう通タクライライふさん
あらへがあんまりあやべるのと役史エイシの廟タケル系キ
ききうくタマク眼マカえまきうよ歩ハシくハシきたせタセ詠ヨンあづ
ふあやべれ奈食ナシやうほしがらアチヤチヤうんだろ

きうくせくせ北ヒタチ「詠近さん」の宴ミタおやア脚踏ハタハタ
自キムのひらう通ココレサおやうだんトおやアねへゆ
さんあらへりぬ卷マヨ煙タバコをかじして香ハラハラしてゆく
おやアねへり黒人アフリカ人ふもとえ村ムラると又アタマゆましい
のをりりもるせりよアタマきうくせくせラヤラヤわさん
のまちくら櫛リムが歩ハシるヨ北ヒタチ「ナニけもがトあるくたうと
またたごとのひりのひぬゆう北ヒタチへのおざらふもさうたるまのり
をもあもじとまきくホカくとやけてゐるふ北ヒタチへあきくホカくとせり
とをあのひらをあた北ヒタチアツアツトとびあぐくみふ車カをあ
づらをひりあく

たるや男のももせうあーをああへ
ともせびくろーとく目をままー「アイターーあふイモる
だぬくがくぶゆくもトをなあぐりすみ北へがあーをもくへを
だうとどうばまむろとかくらあるあそもを
ひくりかせぐもくらんじめんとくだらり かくも 繰ぎふ
女達へそくく は陽よをよささき
そくく は陽よをよささき

西洋道中勝栗毛六編上

